

八丁堀から愛宕下・采女が原を経て両国へ
「猫定」を歩いて見る

六代目三遊亭圓生の落語のカセットテープを買ったのはもう何十年も昔のことになってしまった。勢いで買ったが、いざ買ってみると落ち着いて聞いている時間がなくラックに入れたままになっていた。

45, 6才の頃だっただろうか、カセットテープの整理を兼ねて改めて順番にじっくり聴く機会があった。

この時に強く印象に残った作品が、「鰻沢(かじかざわ)」と「猫定(ねこさだ)」だった。いずれの話も、スリルとサスペンスに満ちた映画を見るような迫力で、「鰻沢」にはオチ(サゲ)があるが、「猫定」にはそれはない。

「猫定」の大きな筋書きの中には「滑稽さ」はない。ひとつひとつの情景の中で、時々洒落なやりとりを入れて笑いをとるところはあるが、それ以上には踏み込まないで、ひたすらシリアスなドラマとして流れていくのが面白くて今では「私のお気に入り落語」のひとつになっている。

さらにこの落語には、東京(江戸)の古い地名が登場するので、聴いているだけで引き込まれる。

三遊亭圓生は、枕で両国回向院に「猫塚」なるものがあることに触れて、嚟に入り、主人公である八丁堀に住む魚屋の定吉の人となり語り始める。

八丁堀は、慶長17年(1612年)に通船を目的として掘られた長さ八丁の水路で、現在の地図で見ると、首都高速の京橋JCTから真東へ亀島川までを結ぶ堀割になっていた。京橋JCTから北北東へ江戸橋JCTまでは楓川が、京橋JCTから西銀座JCTまでは京橋川がそれぞれ流れており、この流れと亀島川を結ぶ水路として新たに切り拓かれたものだった。地図上で水路の距離を測って見たら800m弱あった。

八丁堀界隈は寺町で、「やてら町(八丁堀寺町・野寺町)」といわれていた。寛永12年(1635年)に行なわれた江戸城下の拡張工事により、移転命令に従わなかった玉圓寺以外の寺は郊外に移転した。そこへ町奉行所の与力・同心が移入してきて、御組屋敷と町屋が混在する町になった。

八丁堀の町は、南北に流れる楓川と東西に流れる八丁堀に囲まれた島であったことから、日本古来の季節の風物「春のさくら・秋のかえで」にちなみ、明治18年(1883年)に八丁堀の名を桜川と改称した。

しかし昭和44年(1969年)に埋立が行なわれて、風流な名の堀割は消えてしまい、八丁堀につながっていた楓川も京橋川も首都高速道路になってしまった。

日比谷線八丁堀駅の南端の出口A1を出ると小雨の八丁堀駅前交差点。北東から南西に走る新大橋通りと馬場先門と永代橋を結ぶ東西に走る道の交差点になっている。新大橋通りを築地方面へ少し歩くと、ビルの中にだだっ広い緑地が現れる。「[中央区立桜川公園](#)」と表示があり、雨の中で一人の男性が清掃作業をしていた。緑地の傍らに建つ看板に、ここに八丁堀という堀割があったことを記してあった。(右画像:桜川公園)



八丁堀の玉子屋新道(たまごやじんみち)に住む魚屋の定吉。

実は魚屋とは名ばかりで、賭場に入出入りする遊び人。

「東京時代MAP 大江戸編」や江戸古地図関係 web の情報等を参考にして調べて見ると、「玉子屋新道」があったのは八丁堀三丁目の、現在の地図で見ると八丁堀3-15と3-16の間の路地と思われる。

江戸時代の地図と現在の地図を重ね合わせて見ると、この界隈の細かな路地の形は昔のまま変わっていない。

現在の八丁堀二丁目には松平越中守屋敷や御組屋敷などが中心で、亀島橋付近に町屋があった。

一方、八丁堀三丁目は殆どが町屋で、それぞれの路地には「XX新道」と名が付いていた。

玉子屋新道と言う名の由来は、横丁に卵焼き屋でもあったのかと勝手に想像したのだが、見事に外れた。

その昔、この地に玉圓寺という寺があったことから、この寺の南側の路地を玉子屋新道と呼んだらしい。

玉圓寺は創建時期不詳、創建当初は亀島山玉圓寺という真言宗の寺で八丁堀三丁目にあった。寛永7年、

僧慈専が住職になった時に浄土真宗に改めた。明治維新後、荒廃した寺を現在の地（八丁堀1-8-3）へ移して再興した。八丁堀三丁目のどの辺に寺があったのかは定かではない。

八丁堀駅前交差点から新大橋通りを永代橋方面に向かうと、すぐにライオンズマンションの先で細い路地が出迎えてくれた。誘われるように路地に入って行くと、江戸古地図の世界へ飛び込んでしまったような錯覚に陥る。

路地を抜けると茅場町方面に向かうすずらん通りが一直線に走っており、これを横切るいくつもの路地が横切っている。路地に名前が表示されてはいるわけではないが、江戸古地図で調べたとおりの配列で路地が並び、嬉しくなってくる。

これが屋根屋新道、これが玉子屋新道、上大通り、近江屋新道、・・・。

古地図によると上大通りを西に進むと京橋川が流れており、その少し手前に「イソベ大神宮」があったようだが、現在は天祖神社となっている。（上画像：[玉子屋新道](#)はここだと思う）



ある日、定吉は朝湯からの帰り道で三河屋に立ち寄り朝酒を楽しむ。

この店で一匹の黒猫と出会う。「縁起の悪い黒猫」と邪険にされているのを見て不憫に思いもらい受けることにし、懐に入れて家に持ち帰る。

「クマ」と名付けられて同居人になったが、

女房のお滝は猫好きでもないのですほど喜びはしなかった。

ある日サイコロを振って、丁半の目をクマに語って聞かせて見たら・・・。

賭場へ出かける時はいつも懐に入れて連れ歩き、

「猫の定さん」「猫定さん」と呼ばれるようになった。



八丁堀には大名・与力・同心等の屋敷があり、その隙間に庶民が暮らしていたようだが、武士と町人がバランスを取りながら生きていく空気が何かあったに違いない。

町屋の中には銭湯も三河屋という飲み屋もあったのだろうが、古地図にはそこまでは記してなかった。

どの路地を歩いても、ついこの間まで粋な飲み屋だったと思われる家が何軒かあったが、閉店・移転などの表記が目立った。おそらく、高層ビルに上から覗き込まれるような江戸情緒の路地裏も再開発が決まったのだろう。

ある時、定吉は江戸にいられない状況になってしまい、猫を女房のお滝に託して旅に出る。

お滝は、夫の不在中に若い男を連れ込んで不貞を働く。

それとは知らぬ定吉は江戸に戻るや、再び賭場通いが始まり

猫を懐に入れて、愛宕下の藪加藤（やぶがとう）へ博打に出かける。

愛宕下は文字通り愛宕山の麓で、大名屋敷が並ぶ町だった。愛宕山は海拔 25.7m、今でこそ目立たぬ突起ではあるが、江戸時代には海を眺められる景勝の地だった。

北麓の溜池に近い大名屋敷の間に「藪小路」という路地があった。藪小路の南側には近江水口藩加藤越中守の上屋敷があり、俗に「藪加藤」と呼ばれ、屋敷内の大部屋で賭場が開かれていた。

銀座線を虎ノ門駅で降りて、西新橋一丁目交差点と虎ノ門交差点に囲まれた路地裏に入ると、そこは八丁堀の路地裏と同じような風景だった。地図を片手に路地を一本ずつ確かめながら歩くと、ここも閉店・撤退した小料理屋ばかりで、しかも「Keep Out」と書かれた黄色いテープで封印されていた。再開発が決まって取り壊しを待つ状態になっているようだった。

「藪小路」のありかはすぐにわかったが、やや広めの道路になっていて名前が持つイメージからは遠い感じがした。定吉が博打をしに来た「藪加藤」（加藤越中守上屋敷）は、「虎ノ門ヒルズビジネスタワー」になっていた。（右画像：加藤越中守上屋敷跡・手前の道が藪小路）



藪小路の北側の路地が消滅して高層ビルになってしまう日が近いことを考えると、雨のち曇りで散策には適さない日ではあるが、今日をこの旅の好機とした判断が正しかったような気がしてきた。

安政4年(1857年)に描かれた歌川広重の絵「愛宕下藪小路」を見ると、桜川の流れの岸に竹藪が描かれているので、これが「[藪小路](#)」の地名の由来と考えられる。

江戸時代には蕎麦屋の御三家は「更科」「砂場」「藪」と言われ、それぞれの名を冠した蕎麦屋が各地に誕生した。「藪加藤(やぶがとう)」もそのひとつではないかと想像したが、それは外れだった。蕎麦屋の二階の大広間が賭場になっていたというのも面白いと思ったのだが残念な結果に終わった。

ところが、藪小路の角まで来たら「[砂場](#)」という蕎麦屋があったので驚いた。正式名称は「大坂屋砂場」と言い、創業明治5年(1872年)の老舗で創業当時は「琴平町砂場」と言っていた。史実と現実と想像が見事に合体した感じで、半ば浮かれ気分になりながら、雨上がりの路地を虎ノ門駅に向かった。

定吉が八丁堀の玉子屋新道から愛宕下の藪小路までどこをどう歩いたのかはわからないが、現在の地図で調べてみると、最短距離で約3.2Kmの道のりになる。

藪加藤で一仕事終えた定吉は八丁堀に向かって家路につく。

新橋の鰻屋「喜多川」で一杯やり、ほろ酔い気分で采女が原まで来た時には土砂降りになってきた。

暗闇の采女が原(うねめがはら)、土砂降りの中で立ち小便をしていたら……

現在の地図で調べて見たが、新橋に「喜多川」という鰻屋は見つからなかった。浮世絵画家豊原国周の遺作に「新橋日吉町喜多川楼之図」という絵があるが……、烏森に「きたがわ」という焼鳥屋があるが……、いずれも関係があるのかどうかはわからない。

采女が原は現在の銀座五丁目、昭和通りと首都高速都心環状線に挟まれ、歌舞伎座の向かい側から新橋演舞場の裏手辺りの原っぱで、現在は[采女橋・采女橋公園](#)として地名が残っている。

雨上がりで蒸し暑さが残る人混みの中を銀座から昭和通りを横切って三原橋まで来ると、左側に歌舞伎座が見え、右側には建物のない空間が広がる。「築地川銀座公園」と名付けられ、半地下の首都高速道路の上に広がる現在の采女が原は、殺風景な平坦地という点では、圓生の語り口とも合致する。

今治藩主松平采女正定基の屋敷があったが享保9年(1724年)に火災で焼失して麴町に移転した。移転後は火除地として空き地のままになっていたが、八代将軍徳川吉宗の時代には馬場として使われるようになり、流鏝馬なども行なわれていた。これを起点として小屋がけして様々な見世物が行なわれるようになり、後に歓楽街として発展したと言われている。明治時代には銀座煉瓦街と築地の外国人居留地との間に位置して、和洋混淆の新興市街地が形成された。(右画像:采女橋から銀座方面を望む)



藪加藤から采女が原までは2Km弱の道のり、さらにここから玉子屋新道までは残すところ1.5Kmほど。

雨の中、唐傘をさして裾をからげて片道3~4Kmほどの道のりを歩く定吉の後ろ姿が目につく。

ここで定吉の身に災厄が襲いかかる。

さらにそれをも凌ぐ驚愕の出来事が……、

そして……

圓生は、「両国回向院に祀られる猫塚の由来の一席」と締めくくる。

相撲が終って静けさを取り戻した両国駅を西口に降りて、南へ京葉道路を渡ると、両国シティコア・住友不動産両国ビルの南側に[回向院](#)がある。高層ビルに押しつぶされそうな立ち位置になっているが、浄土宗の寺で正式名称は諸宗山無縁寺回向院。

1657年の明暦の大火(振り袖火事)の後、時の将軍徳川家綱の命を受けて、焼死した約11万人の被害者を葬った「万人塚」が始まりで、度重なる大火や水害の犠牲者の無縁仏も埋葬してきた。また、宗派に拘らず、人に限らず、この世に生を受けたすべての生き物の供養をしようという考え方で、人のために命を捧げた様々な動物の慰霊碑や供養塔等も建っている。猫塚の横に鼠小僧次郎吉の墓があるのも面白い。



以上